

日立電鉄線

最近では「日立電鉄線」というローカル線があったことをご存じない方も多くなり、その事実にもちょっとしたショックを受ける、今風の言葉でいえばジェネレーションギャップ?!

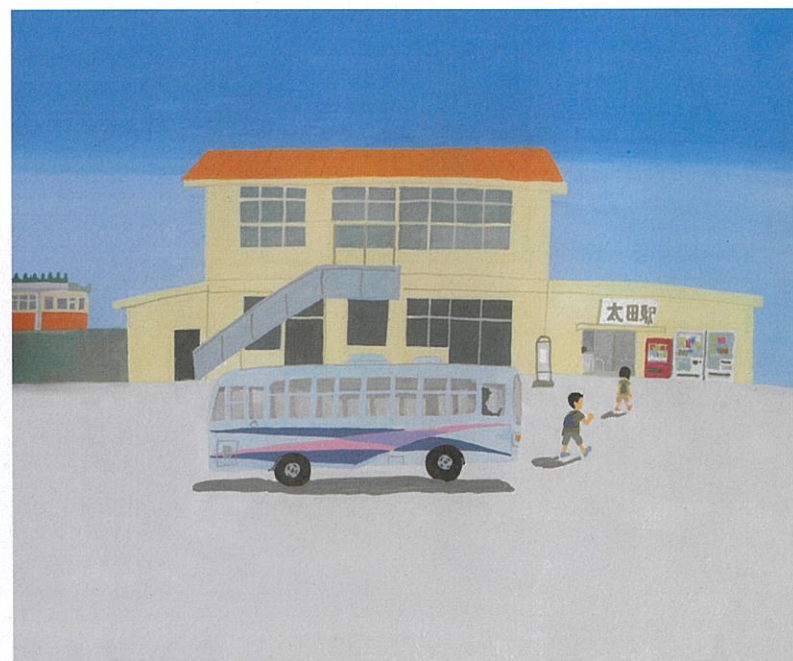
二〇〇五年に廃止となつてしまった日立電鉄に関する本・冊子を手にする機会があり、あのチンチン電車を大切な思い出としてとどめようとしてくれる方々にお話をうかがってきました。

【取材】阿部深雪、塩原慶子

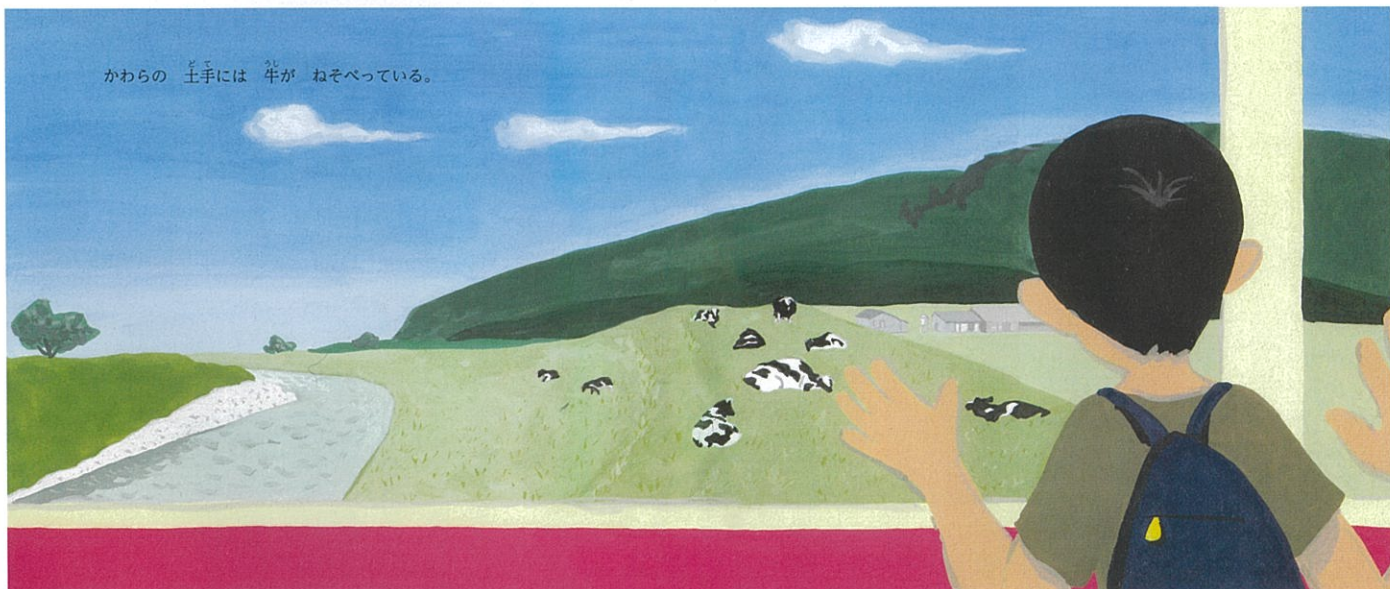
絵本がたくさん置いてある素敵なカフェのオーナーさんから知人を通してこの絵本を教えてもらったのは昨年の夏。「日立電鉄の絵本があるのよ」と。遠く富山県射水市で開催されている「おおしま国際手づくり絵本コンクール」の最優秀賞を受賞し同絵本館が発行しています。



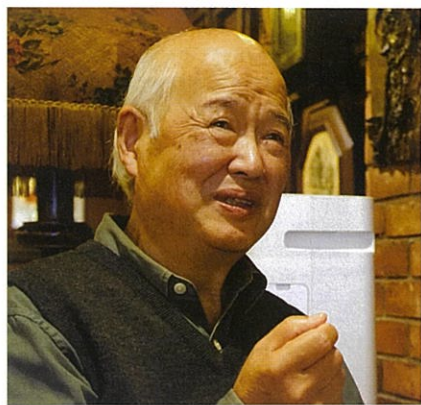
「海への町へ」著者：ときさき きよし 発行：富山県射水市大島絵本館 おおしま国際手づくり絵本コンクール2015 最優秀賞



夏休みに一人の男の子が、親戚のいる海への町へ「チンチン電車」に乗って会いに行くお話です。ペー지를めくると、里川の土手にいつも草を食んでいた黒い牛の絵や、一面の田んぼの中を走るチンチン電車、沿線のお米屋さんの店先の風景など、常陸太田にお住いのかたなら皆さんが「なつかしい」と歓声があがるに違いない絵が続きます。



著者のときさきさんは、高萩市にお住まい。子どもの頃、お母さんのご実家へ遊びにいくたびに、常磐線大甕駅で日立電鉄線に乗り換え常陸太田駅までチン電で出かけたときの思い出が絵本となったそうです。



【寄稿】ときさき きよし さん

二十代後半に谷内こうたさんの絵本をみて、郷愁を覚える作風など子どもをあまり意識しない絵本に刺激をうけて絵本作りを試みるようになりました。何冊か作りましたが、仕事を持ちながらでは、ままなりません。定年近くになって、日立電鉄線が廃線になるというニュースを知りました。チン電の思い出。母の実家が常陸太田から北に行った山あいの里。実家に行くときは必ず大甕駅からチンデンに乗った。乗車時間は十五分か二十分くらいの短い時間でしたが変化にとんだ景色に胸が躍った。海辺の町、潮の香り、広がる水田、そして最も胸がわくわくさせられたのは、大橋駅に差しかかり、その先から人家の屋根を見下ろしながらゆっくり走っていく景色、橋脚が高く、ここに差しかかるときはいつも胸をワクワクさせられた。

遠くに見える山々、石を切り出す岩肌、駅の倉庫、里川に差しかかる橋、土手に寝そべる牛たち、常陸太田の古い町並み、異国に来たみたいでした。それらを絵本に残したいという気持ち。十一年前に定年を迎えて描き出す。絵筆を持つことが少なかった時間が長かったため、ギャップを埋めるのが大変だった。絵を描くにあたってスケッチや写真撮影に何度も出かけた。あとがきに、「今」ある時間、たちまち過ぎていく時間、一日一日の大切さ、などと書いてありますが、あとで気づくと、村で暮らす子どもにとつて町に出かけていくことは出会いの旅、未知への憧れ。それらが自然に絵本に出ていると思えました。

今日ものんびり 日立電鉄

武相鉄研OB会発行

ひょんなことから日立電鉄の写真集をみつけ、懐かしさにどっぷりはまって奥付をみたら、いかにもオタクのような6人の男性の雄姿に目が留まりました。冊子を企画発行しているのは「武相鉄研OB会」の皆さん。神奈川県にある中高一貫の私立男子校・武相高校の部活として、山田京一先生(当時)を顧問に1979年に活動を開始した由緒ある鉄道オタクの活動記録でもあります。このような貴重で詳細な記録を残していただけただことに尊敬を込めてオタクと呼ばせていただきます。

2005年の廃線が決まってすぐ、2004年春から何度も取材で足を運び、合宿や部活動以外にも、個人的に取材を重ねてこの冊子が生まれました。「旧大橋駅ちかくの鉄橋付近は、当時は施設の老朽化が進んでいて、電車がゆっくりととととと走るのが思い出深いです」と山田さん。「道路と並走する線路を、車に乗って撮影した沿線のDVDも懐かしいです。」

BRCプロ発行・プチ写真集(小冊子)のご案内
※QRコードをスマートフォン等でスキャンするとアクセスすることができます。

